

第3回 札幌市国際戦略プラン懇談会 議事録

日時：平成24年7月27日（金）13：00～15：30

場所：札幌市役所本庁舎地下1階 1号会議室

出席委員：石井座長、石山委員、加藤（丈）委員、加藤（由）委員、木村委員、熊谷委員、佐藤委員

1. 開会

それでは時間になりましたので、第3回札幌市国際戦略プラン懇話会を開始いたします。お忙しい所お集まりいただきありがとうございます。まずお手もとの資料の確認をさせていただきます。資料1としまして、6月30日に実施しました市民参加事業「国際都市さっぽろワールドカフェ」の実施報告書、資料2と致しまして第2回懇話会での皆さんのご発言のポイント、資料3として札幌市国際戦略プラン概要版、資料4としてアクションプラン施策項目案以上4つでございます。お手元にご覧いただけますでしょうか。また、国際戦略プランの上位計画である「札幌市まちづくり戦略ビジョン」の概要でございます。本日は次第でございますように、最初は「国際都市さっぽろワールドカフェ」実施報告、二番目に札幌市国際戦略プラン案、三番目にアクションプラン施策項目案についてお話頂きたいと思っております。本日の議論につきましても、資料及び議事録を公開させていただく予定でございます。それでは、石井座長、議事進行についてよろしくお願いいたします。

2. 議事

<石井座長>

では、早速ですが、議事に入りたいと思っております。議事の一番目「国際都市さっぽろワールドカフェ」実施報告について、事務局よりご説明いただきます。よろしくおねがいします。

（資料1について、事務局から説明）

<石井座長>

どうもありがとうございました。ただいま事務局から頂いた説明の中でご意見があれば、お願いいたします。

<熊谷委員>

36%が外国人ということだったが、国別の内訳や在住の区別はどうなっているか。

<事務局>

国につきましては、中国出身の方が非常に多くいらっしゃった。全体としてはアジアの方からの応募が多かった。

<熊谷委員>

私の感想としては随所に面白い意見が多かった。74%が外国人と交流したいということで来たのだろうか。ここで出た意見は、どれが外国人の意見なのかはわからないか。

<事務局>

女性が多いが、意見に名前を書いているわけではなく、外国の方も日本語を書かれるので特に区別はしていない。

<熊谷委員>

ということは、外国人の意見を聞くというよりは交流や相互理解を深めるのが第一ということか。

<事務局>

外国人と日本人の方々が話し合っていくなかで生まれた意見ということを補足したい。

<熊谷委員>

開催にあたり、どなたかいらっしゃいませんかというメールを頂いて、留学生へもどうかと勧めたが、(日本語検定)1級のために勉強している方でも、オーストラリア人でも、アメリカ人でもいいということかと感じた。日本語でディスカッションができないので、通訳が必要だとも。外国人の意見として外国人だけで意見を聞く機会があっても良いのではないか。これはこれで面白い取り組みと思うが。

<佐藤委員>

私もこれを拝見したときに、外国人と日本人の人数は書いていないと思った。どのような国の人が参加したか、など。国の数はどれくらいか。

<事務局>

留学生の方が多く、中でも中国の方が多かった。あとそのほかでは、たとえば帰化された方というと南米の方がいた。国際交流員として5カ国の方にも参加いただいている。

<佐藤委員>

100人の方が参加されているので、1人1人の意識づけになったと思う。これを拝見していると、班が20に分かれていてそれぞれの班の意見が出されたまま、そのまま書かれているので、多少集約されたものが欲しかった。どういう意見が多かったとか。

<石井座長>

これは逆に色々な意見を出してもらおうという目的だったということか。

<事務局>

集約というよりはできるだけ多くの意見を出してもらおうことが目的だった。

<石井座長>

もちろん使えるものがあれば使うという意図でやられたのだと思う。まとめるところまでといっても、実際にはまとまらないような面もある。是非色々な若い人のアイデアを活用していただければと

思う。

よろしければ、続きまして議事の2、国際戦略プラン案の説明に移りたいと思う。

(資料3について、事務局から説明)

<石井座長>

事務局で説明いただいた内容について、議論に入りたいと思う。国際戦略プラン案につきましては、これまでの議論を踏まえて構成した内容ということで伺っています。今日のご欠席の方が3名いらっしゃるが、会議の時間を通常より30分多く取って頂いているので活発な議論をお願いしたい。理念についてですが、まだ意見を出しづらいと思う。むしろ基本方針と施策の柱を話し合い、そのあとに理念について話し合いたいと思う。基本方針の柱を3つに設定していただいて、それぞれについて施策の柱を数のバランスは悪いですが、3つ、2つ、1つと設定していただいている。これをワンセットで議論を始めたいと思う。それではどなたでも結構ですので、ご意見をお願いしたい。

<佐藤委員>

基本方針を1、2、3に分けて、さらに具体的な柱があるというのは、分かりやすくいいと思う。その中で、たとえば最初の「札幌のブランド化と積極的な情報発信」というところでは、札幌の情報を具体的にどう発信するかという事まで踏み込んで検討した方がいいと思う。札幌市はどういう所なのか、インターネットを使ってやるか、テレビCMを使うか考えるべきだと思う。そのときの予算づけはどうなっているのかお聞きしたい。国際化、札幌のブランド化のためにどの程度の予算がいるのか。もし予算が少ないのであれば国や道と一緒にやるのだろうかと思った。

<事務局>

予算については今の時点ではわからない。財政にも確認しないといけないが、基本的には予算をかけることが求められているので、できるだけ関係機関と連携していく必要がある。

<石井座長>

資料をよく読むと、経済的な活力を前面に出すということで、1番目に持ってきているが「札幌を拠点にする」と書いてしまうことで、おいでという片方向の感じがする。市民が主体となって交流促進をするという話が前提にあって、それで札幌の魅力がより伝わるというプロセスの結果として、いろいろなものが(札幌に)入ってくる。どちらかという、今まで話し合っていたのはそういうイメージだったと思うが。2番目の市民一人ひとりというキーワードが、方針の始めにきたほうがわかりやすいと思っていた。

<佐藤委員>

しかし、そうするとこれまでと変わらないというか、ワールドカフェで話したような事をやればいいのではないかということに留まってしまいそうだ。

<熊谷委員>

札幌という市民の集合でもある。札幌をハブというか、拠点にするということは良いのでは。ブランド化についてだが、北海道の札幌ということであれば、北海道のブランド化はできている。それに乗って行くのであれば、「日本という王冠の上に乗っている宝石としての札幌」とか、「北海道という王冠の中の宝石札幌」というようなキャッチフレーズができれば良い。”Malasia, Truly Asia” “it’s more fun in the philippines”など、各地でキャッチフレーズが生まれている。札幌や北海道で一つイメージを作る必要がある。個人的には国際化ということ言えば、1番目に「札幌」と出てくるのは良い。「拠点」ではなく、何か違うものにできないかと思う。

<石井座長>

今私が言いたかったことは、場所に捉われると動きのダイナミクスが言葉として無くなってしまうということ。こちらからも出て行き、出て行った結果としての戻りがあるので、経済分野でもそのメカニズムを言った方がいい。「札幌を拠点に」ということが動きがないように感じるということ。

<加藤（由）委員>

札幌を拠点にして、市内だけでなく、札幌に近い石狩市などの札幌圏を含めるという前提で、札幌で狭いというのであれば札幌圏という言い方もあるかもしれない。それで締めくくるわけではないが、石井先生のおっしゃるとおり、札幌のみだと認識されそうだと思う。

<石井座長>

頭に「様々な国際交流を増やし」という形容詞がついて、後ろに「札幌の都市の活力」というような、表現だけの話で言うと私が言いたかったのはその程度の話。

<熊谷委員>

サブタイトルというか、下に書いてある文章（札幌の魅力を発信し、海外から人・物・資金・情報を取り込む）の方が良いように思う。「拠点」とすると構えているようなイメージ。

<石井座長>

魅力を発信という方が動きがある。

<石山委員>

基本方針Ⅱの市民一人ひとりが「創造性を発揮して」というのがハードルが高いのではないかと。創造性は施策Ⅰの3番目「国際都市にふさわしい創造的な都市空間づくり」にも入っているから、かぶりすぎではないかと思う。基本方針Ⅱの「市民一人ひとりがいきいきと暮らす地域づくり」という方がスッと入りやすいと思う。

気になっているのは施策の柱Ⅰの2番目、札幌の魅力資源の活用による国際観光・経済の活性化というのがわかりにくい、ということとサブタイトルの札幌経済の国際化の言葉の意味がよくわからない。すごく難しいので、もう少しうまい表現はないだろうか、と思う。

また、施策の柱三番目の札幌の技術を活用した国際協力とあるが、「積雪寒冷地にある大都市札幌の特徴や海外ネットワーク」は今までの姉妹都市提携の基盤があると思う。これからの札幌の経済、

観光の国際化では一方で東南アジアにターゲットを拡げていこうとしている中で、積雪寒冷地という言葉に捉われすぎていると感じた。北海道をより魅力的だと思う地域に訴えかけるなら、文言を変える時期ではないかと感じた。

<加藤（丈）委員>

基本方針のまとめが難しいのだが、Ⅰは外から取り込むだけであって、札幌から発信する、出て行くというイメージはないのか。重点戦略を見ると札幌に呼び込むのと次世代を担う人材育成と外に出て行く人を育てると読めたが、そこと基本方針とのつながりが見えない。外から取り込む、内から発信するというように、少しわかりやすく整理したほうがいい。これをみるとⅠがどっちを向いているのかということが分からないのと、Ⅲが浮いてしまっていて、バランスがどうかと思う。3本柱なら3つが同じバランスになるが、Ⅲだけ軽い気がしてしまう。基本方針Ⅱについて、「市民一人ひとりが創造性を発揮していきいきと暮らす」というのが、多文化共生にどうつながるのか言葉からイメージできない。国際戦略プランとしての基本方針として定めるのであれば、「違いを尊重して」とか「多文化共生」をイメージさせる言葉が入っていないとわかりにくいと思う。

あとは施策の話だが、具体的にどんな施策がいいのかはイメージしにくい。ブランド化とか情報発信はわかりやすいが、国際都市にふさわしい創造的な空間づくり、多文化共生都市を目指したまちづくりというのはイメージしにくい。多様性を認め合うとか具体的な施策をイメージしやすいキーワードがほしいと思う。理念があって、基本方針があって、施策の柱があってと少しずつ具体化していくことが見えるような表現方法が良いと思う。抽象的で申し訳ない。

<石井座長>

まちづくり戦略ビジョンの理念もまだ検討中ということ。逆に重点戦略は産業、結局、経済をかなり意識している。また、環境は市長の脱原発という方向性を含めると、札幌は二酸化炭素排出量が多い大都市でエコな街ではない。潜在的に住みやすくなるリスクを持っている。こちらは明らかにそれを意図して書いている。寒冷地はエコな地域ではないので、それを思い切って変えるということ、外部と交流して、技術を持ってくるという視点は、まちづくり戦略ビジョンを見ているとかなり強く意識した方がいいと思う。エネルギー、環境の問題について、(脱原発の)市長の方針もあるが、原発を止めるかどうかということから言えば差し迫った問題であり、冬とても寒くて市民に優しい街になってしまうかもしれない。それを逆手にとって、戦略性を見越した話になるのかもしれない。いきいき暮らす地域づくりというのは文化だけでなく、生活基盤をどうするかという話も含む。エコの話を考えるなら、創造性を発揮してもらわないと困る。そこは、創造性を切らずに膨らみを持たせることも考えられる。

<熊谷委員>

創造性とは創造都市、クリエイティブシティを全面的に出したいのではないか。いきいきと暮らすのは市民憲章と変わらない、どこの街でもよくある昔から言っていること。どこかに創造性は入れない。

<石井座長>

私は削るということをお願いではなく、いきいきと暮らす地域づくりということをもう少し広げたほうがいいというつもりで申し上げた。

<木村委員>

いきいきと暮らすということについては、多様性や多様な社会・文化出身の中で共存するというこ
とにしたらオリジナリティがある。札幌の歴史と文化という説明であると、どこまで伝わるのか疑問
がある。札幌の近現代としての歴史はわかっている、どれだけ市民に伝わるだろうか。前提条件と
して市民がどれだけ理解しているということがあるので、言い回しを変えた方がよい。

あともう一点。熊谷委員がおっしゃっていた札幌のブランド化についてだが、単純にキャッチフレ
ーズをつけるのではなく、耳に残るものにするのが良い。札幌であれば「ミュンヘン・札幌・ミルウ
ィオーキー」というのがあったように、誰にでも残るフレーズがよい。例えばCMソングが流れたら、
すぐイメージできるように。札幌の現状としてオリンピックを開催したがその知名度が後退してい
るので、今は新しいものを創造するチャンスだと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。魅力をどう伝えるのが難しい。札幌にあって他にないものだと、「雪と
共生する」など言葉はありきたりだが他にはない札幌らしさだと思う。行政が雪で苦勞しているの
で、良い意味でのコピーになるかどうかかわからないが。特にアジアの方が入ってくるときに魅力になるの
が、その要素が大きいと思う。負のイメージを思い切って変える発想も必要。

<佐藤委員>

雪と結び付けて、札幌らしさをアピールするキャッチフレーズを考える。

<石井座長>

エコも雪と共生に全部入るので、言葉を考えなければならないが。先ほど加藤（丈）委員から、3
つの立て方として来る、行く、場、という立て方が非常にシンプルでわかりやすいと意見があった。
そうでなくても、Ⅲが少し異質であるが。

<熊谷委員>

来る、行く、住むならⅡが住む。

<加藤（丈）委員>

Ⅰは取り込む方向で、Ⅲはこちらから行く。表現方法を変えて技術協力で発信することもあるし、
それに捉われず国際的な人材育成を含めた発信の方向性。

<熊谷委員>

経済はやはり取り込む方向で。人や物が向こうから来てもらうということになるか。

<加藤（丈）委員>

出た人が戻ってくることで活性化することもある。

<石井座長>

外に活路を求める企業があれば経済も元気になる。経済も来るだけではない。

<加藤（由）委員>

理想形で言えばそうだ。外から来てくれたら、こちらからも行かなければ。

<石井座長>

行き来を一つにしてしまうと、Ⅲを基本方針にするのはやや荷が重いかもしれない。ⅢはⅠの一部という位置づけになるのかもしれない。

<加藤（丈）委員>

そういう印象を受ける。Ⅲをもっと環境を重視して打ち出すのであれば可能。そうでなければ基本方針の一部に取り込む表現にしたほうがわかりやすい。

<熊谷委員>

やはり理念が検討中なので（難しい）。

<事務局>

理念についてご意見があれば、いただきたい。

<熊谷委員>

柱から考えて、積み上げ式で考えていくのか。

<石井座長>

今はまだ理念から議論を始めるのは難しいと考えた。基本方針の話をしてから理念の話をした方がイメージが湧くと思う。逆に理念があるなら、基本方針があっているかないかだけの話になる。方向性はそれほど違わないので、理念の部分に状況変化で盛り込まないといけないことがあれば、基本方針も遡って変えないといけない。先ほど私が申し上げたエネルギー、環境面で何か事態が違うことがあれば基本方針も変えないといけないし、場合によっては理念もきれいな言葉だけでは済まない事もある。

<佐藤委員>

例えば、基本方針のⅠは交流というか経済を主として外部から取り込み、こちらからも発信する。Ⅱは市民の意識の問題。Ⅲは施策の柱[Ⅰ]の3番目に書かれた創造的な都市、空間づくりという環境づくりを主にした方針とする。このⅢに、施策の柱[Ⅲ]にある札幌の技術を活用した国際協力という点を加えると、環境面に焦点をあてた基本方針となると思う。実際にできるのかというのが問題になってくるが。

<石井座長>

あまり直截に環境と言わずに、豊かな地域づくりのために相互交流を推進するという事だろうか。こちらからも発信し、エコに係るものは取り込むということで両方必要というイメージ。単純な国際協力というより、ターゲットが見えやすい。内容や方向性が見えやすい。そうすると、施策の柱も該当するものが二つくらいになりますね。他にこのあたりの意見はありますか。

では、あまり明確にどうするという話にはなっていないが、基本方針や施策の柱については、意見の中で取り込めるものは取り込むという方針でいいだろうか。

理念ということでどんなことを考えたらいいか。若い人から意見はありませんか。

<木村委員>

理念は検討中だが、3つの方向性がそれぞればらばらなので自分の意見がまとまらないが、難しい単語は使わない方がいい。持続可能性など言葉が出ているが、言いたいことが市民に伝わるかどうか考えると適切ではない気がする。みなさんのご意見を伺いながら、私も具体的に考えたい。まず市民に対して、伝わりやすい言葉で伝えられるものから入る必要がある。

<加藤（丈）委員>

基本的には理念ということで、今までの国際化推進プランを踏まえ、この10年で何が違って、次の10年は何を目指すか考えないといけない。この10年で変わったことと言えば、アジアの時代になり、特に中国が急速に力をつけてきた。北海道に来る観光客もそれまではヨーロッパやオーストラリアが多かったが、いまや主役は中国を中心とするアジアに変わってきている。あるいは、東日本大震災をきっかけに省エネ、クリーンエネルギーなど環境面に関心が高まってきた。持続可能性もそうだが、経済の発展をどう安定して維持していくか。この10年で変わったこと、変わっていないことそれぞれあるが、今後10年で何が違って、それをどう変えたいか表すのが理念。難しいがそれを言葉にしないとならない。漠然とした国際戦略もあるが、アジアの中での札幌の位置づけをより明確にするとか、経済もそうだが、経済発展を目指してやってきたがこれからは環境面を重視するということもあるだろうと思う。そのようなキーワードをもう少しイメージを膨らませて理念に書かれると思っている。

<石井座長>

ありがとうございました。方向感はある程度共有できていると思うが、一言ではなかなか表わせない。言葉だけが長くなると理念がわかりにくくなってしまう。

<加藤（丈）委員>

どのような理念をイメージしているか。一文で表すか、ある程度のボリューム、長さがあるものをイメージしているか。

<石井座長>

今回はどんなふう書いてあったか。

<事務局>

短いフレーズを多く書いて、解説をつけていた。

今までの国際化戦略は、「グローバルパートナーシップが魅力と活力を生み出す世界都市さっぽろ」。世界を結び共に創る共創のまちづくりということだった。

<熊谷委員>

グローバルという言い方はもう古いかもしれない。

<事務局>

キーワードとして「グローバルパートナーシップ」を打ち出していた。

<石井座長>

佐藤委員はどうですか。

<佐藤委員>

ぱっと思いつかないが、それぞれの考えた文章を持ち寄るのが良いのか。

<事務局>

理念はどういう切り口にするか事務局でも考えていますので、次回また御相談したい。

<石井座長>

理念の話は中途半端で恐縮ですが、重点戦略分野の議論に入りたいと思う。これは10年間で集中的に実施する分野を4つに分けている。これらに意見がある方いらっしゃいますか？

札幌ライフという言葉はどれくらい定着するだろうか。

<熊谷委員>

札幌ライフの発信はいいと思う。先ほどの積雪寒冷地というのと、冷涼な夏の気候が結びつくと思う。避暑地や長期滞在につながる。少し前、サハリンで都市と自然を楽しんでいただくというのがあった。広く言えばニセコに来る人が2か所滞在ではなく、3か所滞在になればいい。自然も文化もある、札幌ライフという言葉を出せばいい。

<石井座長>

札幌の生活を売るという視点は重要で前から話が出ていた。札幌ライフの説明をどうするか。ありとあらゆることが書いてあって、札幌らしさがどこにあるかわからない。そう言われれば、そうなのだがという感じである。大都市でありながら自然と共生している、ということをもっと前面に出した方がいい。いわゆる当たり前の大都市ライフの説明になると、どこの大都市とも同じになってしまう。自然の豊かさ、気候や森や水も豊かということで、もっと自然をアピールすることに変えた方がいい。芸術・文化・スポーツはどこまで書いたらいいだろうか。

<加藤（由）委員>

札幌ライフの中に全てが包含されてしまう気がする。下段にある次世代を担う人材育成、外国人のための安全・安心なまちづくりも全て包括された札幌ライフというのが本当はいいのかもしれない。四季折々の自然や気候をもっとうまく出したい。都市気候と自然をもっと分割したほうがいい気がするが、区分けが難しいと思う。

<石井座長>

おっしゃる意味は、逆に言うと3つの柱があってそれを支える情報発信ということですよ。

<佐藤委員>

長期滞在につながる交流促進のための札幌ライフなら、その札幌ライフの説明にある自然や新鮮な食などのキーワードはいいと思う。ただ長期滞在する交流促進を呼び込む上で、ただ単にホテルに泊まるだけでない他の地域にないようなインセンティブや長期滞在のメリットが考えられないだろうか。他の地域でそういう企画はないだろうか。

<加藤（由）委員>

インセンティブのある地域だと、釧路市は既定の場所で5泊するとお金がでるそうだ。

<石山委員>

色々な情報を発信してもらうことを条件に滞在費用無料など、地域それぞれ様々に行っている。だが、この点に絞ると難しくなってしまう。最初はまず大きなマーケットを取って、良さを分かってもらいそれから長期滞在、二地域居住という括りでよい。

<加藤（丈）委員>

日本人から見た札幌の魅力と海外の人から見た魅力はどう違うか考えないといけない。日本人からは北海道は自然が多くて、気候が冷涼で大らかな土地柄が魅力と見られている。海外から見て北海道はどうなのか。カナダ・バンクーバーからしたらそうでもないかもしれない。誰に対しての札幌ライフなのかが大事であり、アジアの中で強調するのであれば印象付け方も変わってくる。全て想定すると網羅的な話になって、どれが札幌ならではの部分なのかわからなくなってしまう。

<石山委員>

そもそも札幌ライフとは、誰を対象としているのか。

<事務局>

市民を含め、対象は広くとっている。

<石山委員>

札幌の人に対してということですよ。発信はそこから意味を捉えて色々な所へしていくというこ

とか。

<石井座長>

個人、企業、行政も含めてということだと思う。集客交流ということ意識して、これからの10年重点的に何をやっていくか考えると、欧米ではなくアジアに絞り込まないと何をやるのかわからなくなってしまう。雪対策を打ち出すならアジアになら意味があるが、先進国なら寒い地域があるので特別雪がどうということもない。重点戦略としてのターゲットを明確にしないと、何をやるのか具体的な方向性が出せなくなってしまう。

<石山委員>

もうすこし簡単な言葉にできないだろうか。

<加藤（丈）委員>

海外の大きな観光都市のように〇〇シティというキャッチフレーズをつけ、端的に札幌を言い表すものがあれば。

<石山委員>

一番わかりやすい言葉を出して、裏にこんな意味が隠れていると市民がわかってくればいいと思う。

<熊谷委員>

裏の意味まで理解できるだろうか。

<石山委員>

印象的な一言を出す方が、一番市民に浸透しやすい。

<熊谷委員>

外の人ではなく市民なのか。

<石山委員>

市民が理解して、やる意味を分かって、みんなそれぞれの方向で動いていく。

<木村委員>

ある意味、市民をのせられるような言葉が必要。ある程度抽象的になるのではないかと。自然や芸術・文化・スポーツなど多岐にわたっているので、それぞれにニーズがある。PMFやスポーツを求める人もいれば、空気や水を求める人もいる。それぞれに対応する、キャッチフレーズをつける。それを総称したのが札幌ライフである。

他の都市の例でいえば、熊本市の「蛇口をひねればミネラルウォーター」がある。それぞれ空気や水、文化など札幌独自の言葉でキャッチフレーズを作り、それを総称して札幌ライフとすればよいの

ではないか。

<石井座長>

スノーシティと言ったら、なんだかよくわからないようだが、雪は分かりやすい言葉だと思う。どういう良いイメージで訴えるかが難しいと思う。

<石山委員>

四季がはっきりしているので、フォーシーズンを出すのも手だと思う。外国の方も北海道は冬も良いが、夏も良いと言ってくれる方が増えている。

<木村委員>

大自然の中の都市はいいイメージだ。熊がいるような。

<石山委員>

色々なキーワードがたくさん出てくるので、そこから絞り込む。

<石井座長>

フォーシーズンというか、夏も冬も。

<加藤（由）委員>

フォーシーズンという言葉はどこかで使われていたような気がする。

<石井座長>

他の所はいかがですか。

<加藤（由）委員>

外国人のための安全・安心なまちづくりとあるが、外国人と出す必要があるのか。外国人のためではなく、日本人と同じように外国人市民も安全に生活できると書かなければ、誤解をまねきそうだ。

<加藤（丈）委員>

外国人のための安全・安心なまちづくりというのは違和感がある。

<熊谷委員>

違和感というか、わざわざ出さない。北海道は安全・安心とよく使っているが。

<加藤（丈）委員>

安全・安心というのは監視カメラをたくさんつけて、といったイメージがありあまり好きな言い方ではない。先ほど言ったように外国人にもという言葉を入れて、日本人と同じように安全・安心にアクセスできるとしななければならない。

<木村委員>

外国人と共につくるまちづくりも良いか。

<石山委員>

長期滞在の項目と一緒にしている。長期滞在と短期滞在では対策が違う。短期滞在の方なら情報さえ入ればよく、長期滞在なら住む場所も仕事も、となる。全部一緒にしているので分けた方がいいのでは。

<石井座長>

そうですね。施策は多様性と言っているから、外国人と共になどの方がシンプルである。基本方針にも多様性とあるが、キーワードを引き継ぐのは問題ないだろう。私は次世代を担う国際人材育成を集中的に実施する重点戦略とするのに違和感がある。これはいつもやらなければならないベーシックなことなので、何か違うような印象をもった。長期滞在につながる、協力という言葉が出ていたが、出ていく場面をどう作っていくかということが、国際的な人材を定着させるためのキーワードだから、そちらが先で、当面の施策になるのではないか。たまたま私は成長戦略として札幌をどうしたらいいかという議論を行ってきたが、キーワードは「新千歳」と「札幌の水道」と言っている。インフラの輸出について国の成長戦略で上げている。大都市の水道はあちこちに出始めていて、札幌だけ時代と逆行している。昔はJICAが技術協力していたのをほとんどやめてしまったという状況にある。新千歳は入りだけでなく出ていくことについても、札幌の人が圧倒的に利用しているので、経済的な展開があるのだと思う。新千歳は札幌のものではないが、札幌が中心となって利用しているインフラなので、もっと中から活用しないといけない。インフラ輸出がどこまで具体的にできるかわからないが、札幌が外に出て行くときの経済的なインセンティブであり、また、協力という意味でもつながる。具体的に外に出ていく戦略が1つでもないと、人材育成はあくまでその裏側である。ベーシックに常に行われるべきものであって、集中的にやる重点戦略に位置付けるのは違和感がある。大事じゃないと言っているのではないが、子どもたちにできることはある程度限られているし、ずっと続けないと意味がない事なので、10年間ということではないと思う。

<石山委員>

中国地域が中国発の研修旅行で北海道の中高生と交流を求め始めているのと、この秋タイから直行便が来る。日本が海外研修に行くときに現地校に行くなど、向こうから求められる機会が徐々に高まっている。たとえばマレーシアの教育庁がすべての受付をし、各教育機関とセッティングをし、どこで何ができるなど対応シクオリティをあげている。これからはこういうことをどんどん求められるが、それに対応する部署がないのが事実。急にはできないかもしれないが、目の前に迫っているのでこの機会に整理するのも必要だと思う。

<石井座長>

そういう新しい対応であれば10年間の重点になる。

<石山委員>

多分、かなり要望が高まっていくと思う。

<石井座長>

上手に取り込むことで、将来的に行くのも来るのも両方に関わってくる。当面の重点という意味合いが出るのであれば、大事なことには変わらない。

ゆっくり議論をしていたらだんだん時間がなくなってしまった。

<石山委員>

一ついいですか、ピンクの枠内でJETROやCLAIR、JICAの記載があるが是非JNTOも入れて頂きたい。短期的に数字を持ってくるのであれば、ここが一番ターゲットになる。

<石井座長>

まだ議論していませんでしたので、「戦略展開の考え方」で他にご意見ある方いらっしゃいますか？

<加藤（由）委員>

観光面でいえばJNTOもそうだが、JETROはアジア研とくっついているのだが、ターゲットを少し絞ったほうがいい。

<加藤（丈）委員>

後は、連携強化と結びつくのかもしれないが、外国人市民がまちづくりに参加するという視点もあるのかと思う。この懇談会でも入っていただいているが、委員会など、色々な機会に常に外国籍市民が常にいるというのが一番いいと思うので、意識的に行う。重点戦略に置いてもいいし、その他の視点に位置づけてもいい。そういった視点があつたらよいと思う。

<熊谷委員>

ターゲット地域の明確化だが、インドや東南アジアは良いのだが、下2つの欧米と積雪寒冷地の交流というのはテーマが明確化というよりは、分散している気がする。それと欧米地域の先進的な取り組みとはどういうものか。

<事務局>

それこそ環境への取り組みがさかんな地域なので、札幌は遅れているとは言わないが、欧米の進んだ取り組みや認識はまだまだ取り込むべきかと思う。

<熊谷委員>

これからの10年ということになるだろうか。北方都市についても行っていくということか。

<事務局>

そうですね、それを使って、環境への取り組みなどに活用する。

<石井座長>

インドはどうだろうか。

<石山委員>

インドは宗教上の問題がある。ベジタリアンといっても、本当に細かいベジタリアン。

<石井座長>

インドは経済的にはどうかわからないのではないか。

<石山委員>

この間もお話させていただいたが、宗教上の対応が宗教と食が密接に絡んでいるので、ここをきちんと対応することが必要。簡易モスクや部屋への矢印などの対応も必要である。あとここでは関係ないのだが、インフラ整備の中でW i f i の整備は必ず入れていただきたい。まず地下歩行空間と地下街を完全にフリーW i f i にして、スマートフォンのアプリで観光情報が全て見られるようにしたい。これは時間もお金もそれほどかけずに早急に行える取り組みと思う。L C C が本格参入してきて外国人が非常に増えている中、情報だけでも英語で構わないので、見られたら今来てくれているお客様にも満足してもらえと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。それでは、4枚目の資料アクションプラン施策項目案について、説明をお願いいたします。

(資料4について、事務局から説明)

<石井座長>

ありがとうございました。事務局からご説明いただいた内容で、資料上段の施策の柱と基本施策についてご意見をお願いしたい。

<木村委員>

その前に内容に関して確認を取りたい項目がある。下段の重点戦略分野になるが、特に次世代を担う国際人材育成、外国人のための安全・安心なまちづくりについて、さらに充実、促進するということがいくつか出てくることになると思うが現状の札幌市はどういう状況に置かれているか教えていただきたい。

<事務局>

学校教育だとA L T という外国人の方からの教育がある。札幌市の取り組みでは総合学習として、国際交流員が学校に赴いてその国の文化を教えるという取り組みを行っている。どちらもさらに色々な取り組みを行っていきたいと考えている。外国人のための安全・安心なまちづくりでは多言語によ

る情報提供の代表的なものとして、暮らしのガイドを札幌市で作成、配布している。こちらは区役所の窓口においてあり、外国人の方が市民と接する際に必要な情報を提供している。

<石井座長>

よろしいですか。この部分になるとかなり多くの要素が出てくるが、それでも足りない部分など出てくると思う。何かある方いますか。

<加藤（丈）委員>

多文化共生のまちづくりについてだが、外国人のための安全・安心のまちづくり、という点について、先ほども話に出たが「外国人のため」と言ってしまうと、日本人の視点からの考えという印象を受ける。「外国人の視点に立った」という表現にすると、外国人市民のことや外国人市民が暮らしやすいまちづくりについて一緒に考えているという印象になると思ったので、付け加えさせていただいた。

<石井座長>

そもそも安全・安心だけではない。安全・安心と言ってしまうと外国人も日本人も関係ない。下にあげている項目は外国人に特化した内容なので、それに合わせると安全・安心という見出しではないかもしれない。下に書いてある物はそれだけではなく、快適とか、外国人にも暮らしやすいという意味合いだとすっきりする。

<加藤（丈）委員>

安全・安心というと防犯、防災に特化しているようなイメージがどうしても出てしまう。

<石井座長>

外国人に特別必要な部分を上乘せするようなイメージがはっきりした方が、ここに記載している意味が出てくると思う。

<石山委員>

芸術・文化・スポーツについてだが、よくPMFやジャズの話は出るが、札幌のように野球、サッカー、バスケットボールのプロチームが三つもある地域は日本でもなかなかない。野球以外はサッカー、バスケットボールとどこの国にもわかりやすいスポーツなので、国内にも、アジアのお客様にも受け入れられるものになるよう発信してほしい。

<石井座長>

野球はあまり海外の方が見るような機会がないのか。

<石山委員>

野球は台湾や韓国には受けるが、中国とASEAN地域には全く受けない。サッカーは受ける。一部行っているところはあるが、海外のお客様への取り組みについては、球団と行政が連携して、観光

に来たお客様、長期滞在のお客様が気軽に観覧できるようになればいい。こんなにプロスポーツがある都市は他にないので、いい武器だと思う。

<加藤（由）委員>

スキージャンプもそうだが、スキー場がある都市でスキージャンプ台がある都市は世界でも非常に珍しい。うちに来ている留学生に一回でいいから行って見てごらんと言うと、非常に受けてジャンプのファンになったと言っていた。寒冷地の技術、雪が降ったのを感知して除雪に行くという世界でも素晴らしい寒冷地の技術を持っているのもわかるが、これがうまくはまるわけでもない。経済の話は別として、観光客に受ける面では雪まつりやスキージャンプ、中島公園で歩くスキーができることだと思う。

<熊谷委員>

先ほど説明いただいた時に札幌ライフを共有するパートナー育成というのが、はじめイメージが違った。説明を聞かないと分からなかった。

<事務局>

パートナーという言い方が良いのか検討中であり、ファンという形になるのかどうか、それぞれの言葉のニュアンスがあるので、検討段階である。札幌ライフは札幌で共に、共有して楽しむという意味である。

<熊谷委員>

そういう意味だと思っていた。到着後に、知り合いをつくるというような意味だと思っていた。日本で言うホームスティとまで言わなくてもホームビジットのイメージだった。少し勘違いをしていた。

<石井座長>

例えばPMFのような音楽祭は他にないし、フローの効果は見えていると思う。シャケが帰るといふか、次のステージの拡がりを具体的に考えないといけない時期にきている。設定といふか何を指すかといふことは、ステージごとに描き分けていかないとずっと続けていけばいいという話ではない。運営上は厳しい環境だと思うので、短期的に次のステージは何をするかなど長く続けるための問題抽出をしておく必要がある。石山委員に先ほど出していたいただいた野球のように、他のものでいかに外国の方に目を向けてもらうか。むしろ足りない部分について、施策を色々打ち出すことが必要だと思う。野球ならそういうセッティングもあるのかもしれない。

<石山委員>

球団も動いていないわけではないので、それを大々的にといってもそこまでのマンパワーがない。それを色々な所で後押しできるような形になればいいと思う。

<石井座長>

札幌ドームも儲けているようだし、役割分担となると球場が少し動くほうがより具体的な方向だと

思うが、イメージが湧くような話が一つずつあるといいかもしれない。

<熊谷委員>

2番の「アジアを代表する観光都市」を目指す取り組みというのは現実的ではない気がする。東アジアとかもう少し絞った方がいい。広すぎて飛躍している。それが理想としても、もう少し絞ったほうがいい。夢がないだろうか。

<加藤（丈）委員>

札幌に限ってしまうと、市内に観光資源があまりない。札幌を拠点として楽しむというなら、色々あるのだが。

<石井座長>

どこまで考えたらよいか。重点的ターゲットがどこになるか。

<熊谷委員>

沖縄のような特区にはなれないのだろうか。中国から必ず沖縄に行かないといけないような。

<石山委員>

マルチビザは去年沖縄で解禁になり東北でも解禁になったが、一度入ってくれば3年間は出入国がフリーになる。そういうのにも積極的に取り組んでいかなければならないが、いかんせん札幌市よりは道が主体になる。ただ同じような枠組みでは、東南アジア地域にとってビザの壁が厚い。やはり韓国か日本かと迷っている人がたくさんいるのは現実なので、少しでもビザに対する障壁を低くする取り組みは札幌市と北海道が協働して行っていくべきである。我々にとって利益に繋がる。幸運にも北海道では直行便が増え始めているので、成田、関西空港を絡めると税関的に難しくなるが、新千歳イン新千歳アウトのものについては査証免除をするなど、ルール作りができてくると思うので、そういう観点から特区を目指すというのはありだと思う。

<加藤（由）委員>

もう一つ、入管法が変わって滞在がカード式になって、主要空港でも（カード配付の空港には）北海道は外れているから、転入転出届をしないと行かない。ここも変えていかないと行かない。

<石井座長>

長時間にわたり、大変ありがとうございました。最後に何か追加でありましたら、いかがでしょうか。

<熊谷委員>

企業誘致ということは入ってくるのか。

<事務局>

入ってくる。

<石井座長>

この国際戦略プランについて、これから最終的な取りまとめに入っているので本日の2番目の内容についても完成していただくことになる。それでは最後に事務局から次回の会議についてお願いします。

<事務局>

次回の会議開催については9月の下旬から10月を予定しております。議事としましては最終的なプラン案、アクションプラン案ということになります。現在プランの文案についても作成中でして、素案も追って送付させていただこうと考えております。今回日程の調整が遅くなりましてご迷惑をおかけいたしました。次回日程については早々にお知らせさせていただこうと考えております。以上でございます。

<加藤（丈）委員>

一つ質問いいでしょうか。指標的なものが今回なかったのですが、次回はありますか。

<事務局>

指標もご提示いたします。

<国際部長>

それでは、これで第3回札幌市国際戦略プラン懇談会を閉会いたします。お忙しい中お集まりいただきありがとうございました。